

声優魂

大塚明夫

声優だけは

唯一無二の声優が語る、仕事・人生・演技論

やめておけ。

「ボス」の生き様が、あなたの声優観を破壊する。」小島秀夫 (ゲームデザイナー／「メタルギア」シリーズ監督)

声優魂

大塚明夫

星海社

62



「声優になりたい」 奴はバカである

「声優になる」 || 「職業の選択」ではない 14

声優が多すぎる 17

声優は自分で仕事を作れない 20

人気がすべて、だが人気で出世はできない 23

ほとんどの声優はローンが組めない 27

才能なき声優は、大人の玩具になって終わる 32

ハイリスク・ローリターンの理不尽な博打 35

「子どもに夢を与えたい」という言葉の傲慢さ 37

「生産社会」を諦めた人間の行き着く場所 39

「声優になる」とは、生き方の選択である。 42

「演じ続ける」しか私に生きる道はなかった

43

「役者にだけはなるもんか」と思っていた少年時代 46

マグロ漁船に乗るのをやめて、芝居のみちへ 50

芝居を始めたら、人生に格段のハリが出た 52

文学座からこまつ座へ、そして出会った声の仕事 57

納谷六朗氏との出会い、そして声の世界へ 59

こんなにもいい仕事はない!? 63

戦友・山寺宏一とつかんだ大チャンス 64

追い風にも向かい風にもなった父、大塚周夫の存在 69

五十を過ぎてわかった、受ける芝居の面白さ 72

ソリッド・スネークと大塚明夫——メタルギアソリッド 75

バトーは「アンドレ」だった——攻殻機動隊 80

ライダーこそ、アニメでしか演じられない大役である——Fate/Zero 85

運がなければ勝てないが、運だけでは勝てない 88

チャンスを次につなげる 92

「声づくり」なんぞに励むボンクラどもへ 93

「いい声」なんて素人でも出せる 96

「声づくり」ではなく「役づくり」ができるのがプロである 100

嘘をつかず、息を吸え 104

台詞にはコードがある 108

芸能人がCVで何が悪い？ 114

刺さる言葉とはツールである 115

感情のストックを増やせ 119

基礎稽古の重要性 122

「リテイクなし」に喜ぶ大間抜け 125

老いて声の出なくなつた後に残るもの 128

大きな役を望め 132

声をけなされてめげる奴は生産社会に戻れ 135

「惚れられる役者」だけが知っている世界

135

「声優になりたいから声優学校へ」という勘違い 140

なぜ君に仕事が来ないのか 145

挑戦しない新人に可能性を感じるわけがない 149

業界人のものづくりの姿勢 152

現場での戦い 155

ぶつかって生まれる絆もある 159

不遇の時期をどう乗り越えるか 161

ファンは感動についてくる 163

身近な人間を惚れさせられない奴は役者にはなれない 165

相性のいいマネージャーと出会わなければ、先はない 171

責任をとれないことの恐ろしさを知れ 177

己のビジョンがない声優は、事務所を移しても無駄である 178

やりたいことのわかっていない若手ばかりだから、私は仕事にあぶれない 179

第五章

「ゴール」よりも先に君が知るべきもの 177

「演じたい」のか、「人気者になりたい」のか 184

ちやほやされたいならそう言いなさい 189

本当に好きならばやれる 192

「一生役者」を目指すなら、一度は社会に出ろ 195

「声優になりたい」人のおかげで私は楽をしている 197

ちやほやされれば満たされるとは限らない 198

博打の道でも楽しく生きよ 201

オーディエンスとしての目を肥やせ 205

いい本、いい役者、いい役、いいスタッフ、いいオーディエンス 207

いずれ死ぬる時まで 209

ゴールはない。 214

はじめに

声優・俳優の大塚明夫です。はじめまして。もしくは、いつもありがとうございます。本書を手にとってくださったことに感謝いたします。

さて、回りくどいのは嫌いなので結論から申し上げましょう。

本書で私が皆さんにお伝えしたいことはただ一つ。

声優だけはやめておけ。

嘘偽りなく、これだけです。

「卒業したら声優学校に入って、声優プロダクションの養成所に進んで声優になろう」と考えている無邪気な中高生の皆さん。

もしくは、養成所で何年かを過ごしながらチャンスがうかがっている声優の卵たち。

あるいは、既に声優プロダクションには所属しているものの、一言二言しか台詞のない役がたまに舞い込んでくるだけの現状に焦り、「事務所を変えた方がいいんじゃないか」と

悩んでいる現役の声優諸君。

悪いことは言わないから、やめておきなさい。

私が声の仕事をするようになって、早いもので三十年が経ちました。多少の起伏はあったものの、着実に自分の信ずる道を歩み続けて今に至ります。数々の洋画をはじめ、ゲーム『メタルギアソリッド』シリーズやアニメ『攻殻機動隊』『ブラック・ジャック』など、多くの素晴らしい“代表作”にも恵まれました。年に数回は舞台にも立つようになり、声優としても俳優としても、過去のいつよりも充実していると感じます。

私のこのような経歴は特殊なものです。誠実な努力さえ重ねれば、誰でもいつか私のようになれるよ、などとは口が裂けても言えません。

率直に言って、「声優」ほどハイリスク・ローリターンな生き方も稀です。若手声優の多くがその現実に打ちのめされ、時に失望し、人によつては幸福とは言い難い形で現場を去っていきます。おそらく多くの人がその実情を知らないか、あるいは根本的に誤解しているのでしょうか。

最前線を走る役者ならば皆知っているはずですが、努力を重ねても報われるとは限らない、むしろ報われないことの方が多いいのがこの世界だということを。私自身、「よくここまでや

「ってこれたもんだよな」と思うくらいです。まっとうな仕事で生きられる人が、わざわざこんな険しい道を選ぶ必要はありません。

「でも、私は声優として子どもたちに夢を与えたいんです」

「大きな役じゃなくても、声優として演じ続けられれば幸せです」

「君の声は普通の人とは違う、って皆に言われるんです」

今までにあちこちで聞いた色んな勘違い——もとい、反論がまた聞こえてくるようです。「大塚明夫がやめとけって言うのならやめておこう」とすぐに思ってもらえないのは、私まだまだ未熟な人間である証でしょうか。せめて本書を読んで、声優という夢をさっぱり諦めていただければ幸いです。

とはいえ、私はあくまで一介の役者に過ぎず、声優界の代表でも、優れた講師でもありません。私がお伝えできるのは、私が見てきたもの、私自身の矜持だけです。おっさんの与太話なんて知らねえや、と声優業界に飛び込むおっちょこちよいが不幸にして減らなかつたとしても、私は痛くも痒くもありません。そのような人が絶えないからこそ、私の仕事が途切れないのもまた皮肉な事実です。

さて、前置きと同時に結論も書き終えてしまいましたが、改めて本編に入るとしましょ

う。多少の厳しい物言いはご容赦ください。あいにく、芝居はできても嘘はつけない性分なものですから。

「声優になりたい」

第一章

奴はバカである

「声優になる」≠「職業の選択」ではない

「声優ブーム」と言われるようになって大分たちました。今がいったい第何次ブームなのかよく知りませんが、声優に憧れる人は相変わらず大変多いようです。現場ですれ違う新人の数も、この十年ほどで把握しきれないほどに増えました。少し前までは、「今の『新人枠』に入るのはあいつやこいつ……」となんとなく顔くらいは浮かんだものなのですが。

声優志望者や若手声優と話していて不思議なのは、「声優になる」ことを、まるで就職でもするかのような感覚でとらえている人が多いことです。

話を聞くと、彼らは極めて無邪気に、こんな青地図を思い浮かべているのですね。

まず声優学校に入り、養成所に進んで、良い声の出し方や演技の仕方を教えてもらおう。そして大手の声優プロダクションに所属し、マネージャーがとってくる端役の仕事をこなしながら「出世」のチャンスをうかがおう。最初のうちは安い仕事しかないだろうから、アルバイトと半々くらいで声優の仕事しよう。そのうち大きな役がもらえるようになるにもなるだろうし、そうすれば後はだんだん軌道にのって、いつかは食えるようになるはずだ。私などからすると、さて一体どこから突っ込んだらいいものやら……と煙草の一本でも

吸いたくなくなってしまいう内容なのですが、これを「ベーシック」なルートだと思っている若者は後を絶ちません。

「声優になりたい」

そう思うことは自由です。しかし、「声優になる」ことを「職業の選択」のようには思わない方がいい。この道を選ぶということは、「医者になる」「パティシエになる」「バンドイの社員になる」なんて道とは根本的に違います。少なくとも、私はそう考えています。

よく考えてみてください。この世界には、「声優」という身分を保証するものは何もありません。資格やら免許があるわけでもない。人様に言えるのはせいぜい、「□□という声優プロダクションに所属しています」「××という作品の○○というキャラクターの声を担当しました」くらい。それだって、誰にでも通じる自己紹介にはなり得ません。社会的に見れば極めて頼りない、むしろ存在しないに等しい肩書きなのです。

そもそも、人は何をもって「声優になった」と言えるのでしょうか。声優プロダクション

に所属できたら？ 「いらつしやいませ」の一言の台詞でも、作品の中で発することができたら立派に「声優」なのでしょう。

このくらいは皆さんもご承知だと思いますが、「声優になった」からといって、声の仕事が自動的に、毎月のお給料のように舞い込んでくるわけではありません。一件一件の仕事を、いわゆる「人気声優」たちとも対等に取っ合っつかねばならない。その競争は、皆さんが想像する以上に激しいものです。

コンテンツの制作サイドからすれば、欲しいのは「ギャラが予算内に収まり、かつ良い芝居ができる人間」であることがほとんどですから、テレビや舞台の俳優を声優として使うことだって自由です。「声優という肩書きの人間の方がいい芝居ができる」なんて思い込んでるのは一部のオタクだけです。

つまり、声優という肩書き自体に、「声の仕事を得る」ための効力はないのです。「声の仕事をしている役者のことを声優と呼んでいる」だけなのですから当然です。この順番を取り違えている新人声優がよく、「声優になったのに仕事がない、おかしい……」と悩んだりするので、そこで「なんで僕に仕事がないんだらう」と真剣に考えられる人ならばまだマシな方。「就職」気分が抜けない人にはそれが難しいらしく、「仕事がないのは

おかしい」という考えから抜け出せないまま、大小さまざまな失望を抱いてこの業界を去っていくことになります。

そんな人を、私はこれまでに飽きるほど見てきました。出会う新人声優の九割以上はこの顛末てんまつをたどると言ってもいいくらいです。ほとんどの声優は、十分な数の仕事になんぞありつけないからです。

普段は、それで困り果てている若者たちを見ても、私の方からあれこれ口を出したりはしません。そんなに暇でもありませんから。しかし、今回はせっかく本という形で皆さんにお話しできる機会をいただいたので、声優という生き方の何がおすすめでできないのか、なるべくわかりやすくお伝えしたいと思います。

声優が多すぎる

なぜ、「仕事にあぶれる声優」が多いのでしょうか。

それは簡単な話で、「声優」の数が増えすぎたからです。「声の仕事」は、現在声優と名

乗れる立場の人間の数に対してあまりにも少ない。

日本の「声優」の歴史をみると、一九六〇年頃から洋画や海外ドラマの吹替えが多く制作され始め、「声だけの芝居をする役者」が大勢求められるようになったことがわかります。声優という言葉自体は一九四〇年代からありますが、戦前は主にラジオドラマがその活躍の場で、今私たちが「声優」として思い浮かべる像とは少し違いました。

例えるならば六〇年代は、五十しかない椅子に、五十人の役者が余らず座っているような状態でした。「声だけが必要とされる仕事」が先にあり、それを埋めるため、各配給会社が新劇の舞台役者や売れないテレビ俳優を引っばってきていたので余りようがないのです。「声優なんてのは売れない役者の成れの果てだ」と見なされていた時代の話です。

では今はどうかというと、三百脚の椅子を、常に一万人以上の人間が奪い合っている状態です。

確かに三十年前に比べて、声優が求められる場は多くなったと私も思います。二〇〇〇年代に入ってからアニメの制作数は激増し、フルボイスのゲームも今や珍しい存在ではありません。しかしそれでも、です。椅子の数も増えましたが、一万人の声優を食わせられ

るほどの増え方ではありません。異常に競争率の高い仕事を血眼ちまなこで奪い合うゲームが続いています。

「極端な言い方をすれば、声優になったところで、もらえる仕事自体はろくにないということです。そうすれば当然生計も成り立ちません。しばしば噂されているらしい「声優の多くはアルバイトとの掛け持ちで活動している」という話はまぎれもない事実です。

かくいう私自身、三十歳近くになるまで土木のアルバイトを続けていました。幸い私の場合は早々にそうした時期を終えることができましたが、三十代、四十代になっても「専業声優」になれない人も珍しくありません（もちろん、自分の意志で「ならない」人もいます）。

こんなに商売として成り立っていないものを、安易に将来の「職業」として選ぶのは危険です。即刻やめた方がいい。実家が裕福でいくらでもすねがかじれるとか、声優が駄目でも実家の稼業を継げばいいとか、いつでもしつかりした勤め人のお嫁さんになれる身分だという人間でない限り、近づかないのが正解です。

声優は自分で仕事を作れない

ははあ、「もらえる仕事はろくにない」ということは、大塚明夫は「仕事は自分で作れ、甘えるな」と続ける気だな……。

そんな想像をされたあなたに言っておきましょう。

声優は、自分で仕事を作れません。

これも、声優という生き方の特殊な点のひとつです。

私たちの仕事は「声をあてる」こと。その仕事をこなすためにはあてる対象となる映像なり画が、そして読み上げる文章の書かれた台本が必要です。そして、それらを用意するのは私たちではありません。制作会社、脚本家、アニメーターなどのクリエイターたちです。

私たちは、彼らが作り上げた世界に肉声という最後の素材を提供する職人です。自分で脚本を書いて芝居をしたり、店をやったりする声優もいますが、それは厳密には「声優と

しての仕事」とは異なります。

何が言いたいかわかりますか？

私たちは、ただじっと仕事を「待つ」ことしかできない立場だ、ということですよ。

先ほど私は、声優は少ない仕事を奪い合わなければならぬものだ、と書きました。しかしこの奪い合いにおいてすら、我々がすることは「待ち」なのです。店の棚に陳列された商品のように、とにかく誰かに選んでもらわねば始まりません。

これは多くの声優志望者が見過ごしがちな点ですが、実は恐ろしいことです。誰かが何かを作ってくれなければ——「この作品のこの部分でこれを喋ってください」と頼まれなければ、私たちの仕事は存在しないのですから。

もちろん、仕事を待っている間に己を高めることはできますし、そうするべきです。待つといっても、ただ寝転がっているという意味ではないのです。そんな人間に、マネージャーが仕事を持ってきてくれるわけがない。技術を磨き、知見を深め、少しでも多くの武器を懐ふところに持たねばなりません。そうした努力が、プロデューサーなりディレクターなり、

誰かにふと目を留めてもらったときに活きる可能性があるからです。

ただこうした努力すら、「仕事につながる可能性がある」だけで、「必ずつながる」と言えないのがまた厳しいところです。どれだけ多くの刀を丁寧に研いでいようと、その刀を振るう機会があるとは誰にも保証できません。要するに“運”次第なのです。身も蓋もありませんが本当です。そして、保証されていないからといって何もしないでいれば、いざ刀を振るう機会に遭遇したときナマクラ刀で苦戦を強いられることになる。

待つことしかできない。ひたすら待ち続けても無駄かもしれない。やれることといえば密かに刀を研ぐことのみ。しかしその後何かが起きたとしても、それまでの「待ち」の辛さや鍛錬の苦勞がすべてねぎらわれるようなものだとは限らない……。

これが、人によつては死ぬまで続くのが声優という生き方です。自分で仕事を作れないというのは、かくも寄る辺なき状況なのです。

私は時々、「声優になるくらいなら、漫画家とか漫画の原作者にでもなった方がいいよ」と話すのですが、それは漫画なら自分一人でも作品を仕上げ、色んな出版社に売り込みに行けるからです。漫画も相当ハイリスキな商売ですがこの違いは大きい。声優が現場以

外でいくら声を張り上げようと、それによって披露できるのは「素材」であって、作品として出来上がったものではありませんから。

声優プロダクションのサイトにはたいがい各声優のボイスサンプルがアップされていますし、マネージャーも営業活動としてそうしたツールを使います。しかし、役者の「真価」はやはり完成された作品を通してこそ一番伝わるもの。「完成商品」を自力で作れないことの厳しさについては、しっかりと認識しておいてください。

人気がすべて、だが人気で出世はできない

「商品」として買い手を待ち続けるしかない我々の世界では、何を差し置いても人気があるのを言います。実力があろうがなかろうが、人気さえあればとりあえず目先の仕事はくる。そういうものです。

故に、最近の若手声優たちはとにかく自分の固定ファンを増やすことにやっきになり、技術を磨く時間をどんどん削ってしまう傾向にあります。これは声優だけが悪いとは言えません。選ぶ側も、昨今ますます能力ではなく人気ありきで声優を選ぶようになってきているからです。こうした状況では、こつこつと鍛錬するのがバカらしくなるのも無理はありません。

せん。

しかし、「人気が出る」ということを一種の「出世」のようにとらえ、「人気キャラを演じて人気者にさえなればその先も安泰だ」と考えるのは大間違いです。

これもどうも理解されづらい部分ですが、我々の世界に「人気」はあっても「出世」はありません。

声優業界には、協同組合日本俳優連合(日俳連)が定めた「ランク」という制度があり、日俳連に登録している声優はこの規定に沿ったギャランティをもらっています。ランクにその役者のキャリアや人気が反映されていることは事実ですが、だからといってこれが「地位」を示すのかといったらそんなことはなく、単に時間給の指標になるだけです。しかもランクは自己申告制ですから、ランクを上げたければどうぞご勝手に、と言われる程度のものです。

人気作品に出演すれば業界内外の知名度が上がり、マネージャーも営業がしやすくなります。固定ファンが多くつけば、「この人がCVならキャラクターソングCDを○千枚刷れる」「イベントでこのくらい的人数が呼べる」などの判断によって仕事も増えます。

しかし、イベントでどれほど多くの声援をもらおうと、ファンレターが山のように届くと、それによって盤石の足場が築けるわけではありません。今この瞬間の人気は、役者に対し何をも約束してくれないからです。

普通の会社員が係長なり部長なりといったポジションに上がった場合、何か不始末をしでかしたとか会社の経営自体が不安定でない限り、降格することは滅多にありません。役職を上げるということは、その社員の組織貢献性に対して、会社がある程度の待遇を保証するということでもあります。

では、声優の人気は、何十年も安定して続くものでしょうか。

皆さんもよくご存知の通り、人気とは哀しくもうつろいやすいものです。どれだけ一世を風靡ふうびしようと、少し現場を離ればたちまち次のスターにポジションを奪われ、あるいは単に忘れられ、あっさりと「昔人気だった人」になってしまう。残酷な世界です。

声優として食えるレベルの三百脚の椅子に座るということは、すなわち声の仕事で「最前線」に立つということ。食っていき続けたいならそこを離れるわけにはいきません。どれだけ歳をくい体力的に衰えようと、次から次へと現れる若い声優たちと対等に戦い続け

るしかないのです。

しかも若いときに技術の底上げを怠っていれば、人気にゆさぶりをかけられたときのふんばりがききません。「人気しかない」のと、「人気も技術もある」のでは、セーフティの質がまったく違います。

繰り返しになりますが、声優業界の椅子の数はまったく足りていません。ぼんやりしていれば蹴り落とされるだけです。現実的に考えて、これ以上、椅子の方が大幅に増えることはないでしょう。人気が出て「大御所」扱いされるようになったとしても、時々有名な作品の有名なキャラの声をちょっとやればお金もそれなりに入るし安泰安泰……なんて未来は得られない。

私自身、いつ淘汰とつたされるかわからないという危機感がありますから、そういったものにあぐらをかいてのんびりしたことは一度もありません。この世界に入ってから今に至るまで己の武器を研ぎ続け、最前線に立ち続けています。自分の商品価値は高まり続けている、という自負もあります。

この世界において重要なのは、今のこのとき、その役者に需要が——商品価値があるか

どうかのみ。芸歴が何十年あろうと、有名作品への出演数がいくら多かろうと、明日どうなるかは誰にもわからないのです。

ほとんどの声優はローンが組めない

さて、ひたすら嫌なことばかり書いている気がしますがこれは序の口です。皆さんが気にしているに違いないお金の話をしましょう。

未来の保証なき声優業は、収入という面から見ても得が少ないと言わざるを得ません。大人気の声優をテレビなどで見ればなんとなく「お金持ちそう」と思うかもしれませんが、どんな業界だろうと上位1%の人間は金持ちに決まっています（もつとも、声優業界の上位1%が稼ぐ金額は、他の職種のものよりも低いと思いますが）。そもそもまともに専業で食える声優自体が少ないのですから、大儲けしている声優なぞどれだけ希少な存在かは推して知るべしです。

単純に儲からないだけでなく、声優の収入は大変不安定です。我々は声優プロダクションの社員ではなく、自分の名前で仕事をとる個人事業主ですから、できた仕事分の報酬がすべてです。今月の収入は一万五千円、翌月は十万円、その翌月はゼロ円、なんてことも

あります。

こういう収入形態で生きる以上、社会的な信用は得られないと思った方がいいでしょう。実際、ほとんどの声優は大型のローンが組めないのです。銀行が気前良く大金を貸す相手は、五年後、十年後の収入が約束された人間だけ。「今期の人気アニメで主役をやっています！」と言ったところで、じゃあそのキャラクターはこの先毎日あなたを食わせてくれるんですか、という話ですよ。

もちろん声優全員がローンを組めないわけではありません。私も現在、住宅ローンを粛々と支払っている最中です。「こいつなら金を貸しても戻ってくるだろう」と判断されたから組めたわけですが、デビュー当時にはそんなこととても無理でした。

これだけ読んでもぴんとこないでしょうから、声優の報酬形態について簡単に説明しておきます。

先ほども書いた通り、声優の世界には「ランク」という制度があります。日俳連に登録している俳優に適用される制度で、現在声優として活動している役者の多くがこれに従っ

て報酬を得ています。

一番下に位置するのが「ジュニア」。これは新人養成期間で、仕事一本あたり一万五千円の報酬が基本です。三年間の新人期間を過ぎると「ランカー」と呼ばれ、出演作品の尺三十分に対して一万五千円のランク15を始点に、一万六千円のランク16、一万七千円のランク17……というように千円単位で値段を上げていくことが可能になります。三十分アニメ一クール（十二回分）の主役に指名されたとして、その声優Aがランク15なら、ギャランティは一万五千円×十二で合計十八万円というわけです。

また、作品が二次利用されると、「転用料」が発生します。TV/DVD/ネットと3チャンネルにわたって展開されれば、金額がほしい2・4倍ぐらいになるでしょうか。ランク15なら、大体43万円ということになります。「なんだ意外ともらってるじゃねえか」と思われるかもしれませんが、3ヶ月みっちりやってこれです。主役級の人ですら、これだけでは食っていけないことがわかってもらえらるでしょう。

設定は自己申告制ですが、所属事務所のマネージャーなどの判断も関わってきますから、実際はあまり突拍子もないランクにはできないでしょう。

呼ばれた仕事が映画だろうがアニメだろうが、基準となるのは原則的に作品の長さであ

り実働時間ではありません。三十分アニメのために何時間スタジオに詰めていようと、ラック15なら支払われる金額は一万五千円です（状況に応じて色をつけてくれる制作会社や声優プロダクションもありますが）。

時間割増率のほか、先述した「転用料」というものも支払われます。DVDが出る、テレビのロードショーで放映される、劇場放映で使われる、などの場合に発生する使用料です。例えば「テレビにかかるときは1・7倍」など、こちらも細かい設定があります。

ランカーのギャランティに理論上の上限はありませんが、私の知る範囲で一番高いのは四万五千円程度でしょうか。それを超えるとフリーランス制になり、仕事一本ごとに値段の交渉をする形になります。

時間給は、台詞数などにはかわかわらず完全に固定。三十分喋り詰めだろうが、「おかえり」の一言だろうが変わりません。映画やアニメで、メインキャラクターの声優がモブキャラクターの声を兼任していることがままあるのは、声優を一人増やすことに固定給として一人分のギャランティが確実に発生してしまうからなのです。

どれだけ喋ってもギャランティは変わらないという話でいえば、『アダプテーション』と

いう映画の吹替えをやったときのことを思い出します。

主役の二人、チャーリー・カウフマンとドナルド・カウフマンは双子の兄弟なのですが、どちらもニコラス・ケイジが演じており、声も両方私があてたのですがこれがきつかった。なにしろ、メインキャラクター二人分を一人でアフレコするのです。台本の三分の二近くは喋ったでしょうか。思わず「二人分のギャラをくれよ」とぼやいてしまったものです（もちろんもらえませんでした）。ともあれ、声優のギャラは「発声量」には比例しない、ということです。

そういう意味で、声優にとって費用対効果が高い、「おいしい」仕事はCMだと言えます。拘束時間が比較的短いですし、一日に四本、五本と収録することも可能なのでリターンを大きくしやすいのです。

一番悪いのは実は洋画吹替えて、コストパフォーマンス的には最悪です。丸一日拘束されてCMの四分の一、五分の一といった収入になることも珍しくありません。

また、たくさんの台詞があればその分たくさんの事前準備がいります。アフレコ現場はあくまで作品を完成させる時間ですから、そこでもたとえと練習するわけにはいかないの

です。自宅で台本を読み込み、映像を見て役者の癖を把握し、何度か一人でリハーサルをする……収入が発生しない作業であっても、少なくとも私はそれを行う時間を設けています。コストパフォーマンスのことを考えれば、ただでさえ高給ではないのだからそんな練習はしない方がマシなわけですが、私の目的は金銭的なりターンより良い芝居を納品することにあるので問題はありません。

がつぼり儲けるために声優をやろう、という底抜けのロマンチストがこの本の読者にいるのかどうかわかりませんが、あなたが「あわよくば一攫千金も……」と思っているのであれば改めて言うっておきましょう。儲からないよ。

才能なき声優は、大人の玩具になって終わる

私がこんな本を書いているのは、仕事上のライバルが増えるのが嫌だから——ではもちろんありません。ライバルならば、むしろ増えてくれたらと心から思います。こんなすごい奴が出てきてしまったら、俺の仕事なんてもうないんじゃないか……そんな脅威を一度くらいは味わってみたいものです。

傲慢ごうまんな言い方に聞こえたら恐縮ですが、この三十年、そういう意味でヒヤリとさせられたことは一度もないのです。むしろ、こういう子ばかりならまだ俺の仕事は減らないな、と思うことの方が多いかもしれません。

それが具体的にどういう人たちなのかは後で詳しく書きましょう。私が声優という生き方を皆さんにすすめない理由は、ただ夢破れるだけでなく、それによって傷ついたり、大人に利用されてほしいと捨てられたりする若者を多く見てきたからです。本当に、冗談でもなんでもなく、皆もう少しリスクに目を向けたらどうなの、と思いますよ。

実際のところ、声優になりたがる人のほとんどは声優になれません。実際に声の仕事をするレベルまで到達する人がまず少ないですし、その後声優として生き延びられる人といったらもつとわずかです。

酷い言い方かもしれませんが、大体の奴は「駄目」なのです。

にもかかわらず、声優志望者たちがまるでシンデレラのような甘い成功ストーリーを思い描いてしまうのは、それを体現している役者が実際に存在するからなのでしょう。

たとえば、『新世紀エヴァンゲリオン』の綾波レイ役で有名な林原めぐみさん、そして『名探偵コナン』のコナン役でおなじみの高山みなみさん。彼女らは二人とも、二十代にな

るまで声優になろうなんて考えていなかったそうです。それがあるとき突然声優を志し、あつという間にデビューしたのみならず、あれよあれよという間に一時代を築くレベルの人気声優になってしまったのだから大したものですよ。

言うまでもないことですが、彼女たちにあつて、普通の声優志望者に欠けているものは「才能」です。

そこそこ才能のある人間が努力を重ねてやっと到達する領域に、いとも簡単に届いてしまふ傑物けつぶつがごく稀まれにいます。林原めぐみさんや高山みなみさんはそういう人種です。彼女たちの芝居はすごい。実際に見ている私も心からそう思います。芝居の勉強をしたことがなかったのに何でこの領域にいるの？ とぎよつとしてしまうような役者なのです。

そして、才能のない人間がどれだけ努力を重ねたところで、その領域には決して届きません。努力だけでもある程度まではいきますが、その先の一線を越えるには「才能」というパスポートがどうしても要るのです。

才能の重要性について語るのはとても難しいことです。なぜなら、芝居ひとつとっても「センスのある奴はほっておいてもできるし、できない奴は何を教えてもできない」の一行で済んでしまう話だからです。声優専門学校に通おうが養成所に通おうが、できない人に

はできない。センスのいい人は放っておいてもどんどんうまくなる。理想の上では、学校などはこの「できない人」を「できる人」に育て上げる場所ということになっているのでしようが、私が見てきた限りなかなかそうもいかないようです。

こうした世界を志向する人間ならば、どこかで「自分は天才なんじゃないか」と思っているのでしょうか。私もごく若い頃、「俺だって本気でやれば高倉健くらい……」なんて思っていたことがあるのでわからないでもありません。ただそういう方には、声優学校や養成所を目指す前に、まずは一度自分たちでお芝居でもやってみたらどうか、と提案したいです。その方がよっぽど楽しいし、得るものも多いと思いますよ。

ハイリスク・ローリターンの理不尽な博打

社会的には認められず、技術のレベルより人気が優先され、苦労の分のお金が儲かるわけでもない。それが「職業としての声優」の実態です。まっとうな感性の人ならば、この辺りでいい加減「なんてメチャクチャな仕事なんだ」と呆れるでしょう。私も同感です。

声優の世界を言い表す言葉として、もっともふさわしいと私が思うのは「ハイリスク・ローリターン」です。

大きなリターンが期待できるのであれば、ハイリスクをとるのもありでしょう。しかし何度も言うように、この世界にハイリターンはまずありません。何をやってもローリターンです。なのに、それを得るために冒さなければならぬリスクは常にでかい。

これはもはや、不毛の大地に作付けしていくようなレベルの話です。博打だとしても、よほどのマゾヒストでなければ手を出さないはず。いわゆる「無理ゲー」というやつですね。

最初から腰掛けのつもりです、ちょっと儲けてすぐにまっとうな社会に戻る予定です、というならそれはそれでかまいません。ぱっと声優をやってお金を貯めてお好み焼き屋なり居酒屋なりを開く。そういう生き方もおおいにありでしょう。ただし前述の通り、金を儲けたいならもっとふさわしい仕事があると思います。あなたが宮野真守くんくらいハンサムなら声優もありかもしれませんが……。

二十歳で声優業を始めた子が三十になれば、やっぱりそろそろ結婚したいなんて話にもなるでしょう。四十になれば親父さんが「少し具合が悪いから帰ってこい」と言い出したります。多くの声優が、そうした色んな現実に押されてドロップアウトしていきます。二

十そこそこのごく若いうちならば「幸いすみやかに社会に戻りました」というだけで終わるかもしれない。でも三十、四十になっていたら？

どうか目先のイメージにとらわれず、ロングスパンで考えてみてほしいのです。

声優なんて、極めてつぶしのきかない仕事です。健康を損ねたら一発でアウト。自分の名前一本でやっていく以上、何があっても人のせいにはできません。

声優として生きなければ最低限、そのリスクの中でやっていく覚悟がやっぱり必要だと思います。

たとえ失敗しても人のせいにしなないという心構えがあればいいのですが、私が見てきた多くの売れない声優は、自分が食べていけないことを事務所やマネージャーのせいにしてぶつくされてきました。そういう人は、実際事務所などを変えてもまずうまくいきません。ということはやはり自分のせいなのです。

「子どもに夢を与えたい」という言葉の傲慢さ

改めて不思議に思います。これほどまでにハイリスク・ローリターンな世界なのに、なぜ大勢の人がこちらに来たがるのかと。

それを実際に人に聞いてみると、よく返ってくるのがこんな台詞です。

「私、声優になって、子どもたちに夢を与えたいんです！」

私はこれを聞かされた時に思うのです。随分上からもの言っていないかい、と。

夢というのは、「与えてあげよう」と思って人に与えるものなのでしようか。アニメやら映画で、お金で買えるものなのでしようか。

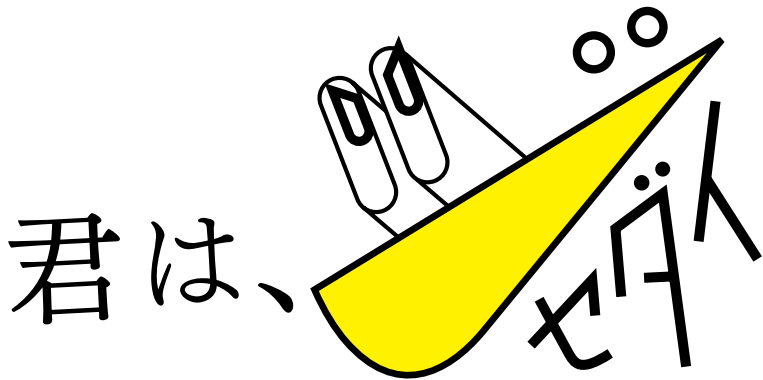
夢とは、まず自分が見るものである——私はそう思います。人に分け与えたり、叶えてあげようとするものではないと。

「夢は見るものではなく叶えるものだ」。そんな台詞で若者を煽る大人がこの社会にはたくさんいます。そうだ絶対叶えなければいけないんだ、と思う人たちが多ければ多いほど儲かる仕事をしている人たちなのでしょう。

煽る大人のこと、夢は叶えなければと強迫観念的に思う若者のことも、頭から否定するつもりはありません。しかし、「夢は見るものではなく叶えるもの」なんていうのはいささか乱暴な理屈だと私は思います。みんながみんな、己の夢を叶えられるわけではないの

ですから。

夢の中には、叶えられない夢も、叶えなくていい夢もあるはずですよ。叶えなければいけない夢しか持てないなんて、それこそ夢のない世の中じゃありませんか？



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!